全老健REPORT

平成26年度医師研修会

全老健は３月５～６日の２日間、静岡・熱海市のホテルニューアカオロイヤルウイングにて、老健施設における医師の役割やマネジメント等について、理解を深めることを目的とした、「平成26年度医師研修会」を開催した。

今年度は、在宅復帰率・回転率向上や看取り、介護訴訟についての講義や、介護報酬改定に関する厚生労働省の講義のほか、全老健の東憲太郎会長との質疑応答を交えたディスカッションの時間を設けた。

グループワークでは、「他職種が望む医師像」をテーマに、リハビリ職・支援相談員からの発言があったのち、老健施設が地域包括ケアの中心的な機能を果たすために求められる老健施設における医師のあるべき姿について話し合った。

冒頭、主催者代表として挨拶した東会長は、「この医師研修会は、マネジメント研修というように銘打っている。医療の専門的なことだけではなく、老健施設を運営していくことも管理医師の大事な役割だ。どのように老健施設の運営に携わり、どのようにハンドリングをしていくのか。そういったノウハウを、この一泊二日の研修会で皆さんと共有したいと思っている」と述べた。

東会長の開講式挨拶

介護職員の資質向上 質の高い介護の確保を図る改定

最初の研修テーマ「介護報酬改定について」では、厚生労働省老健局老人保健課の森岡久尚介護保険データ分析室長が講義を行った。

はじめに、平成27年度介護報酬改定の全体的

厚労省老健局の森岡室長

佐藤委員

な内容について説明。①中重度の要介護者や認知症高齢者への対応のさらなる強化、②介護人材確保対策の推進、③サービス評価の適正化と効率的なサービス提供体制の構築、という3つの基本的な視点に基づき、2025年までに地域包括ケアシステム構築に資する取り組みを、見直しながら進めていくとした。

また、今回の介護報酬改定の方向性について「従来の介護報酬と比べて、基本サービス費は下がっているものの、介護職員処遇改善加算などは増えており、介護職員の資質の向上と質の高い介護サービスの確保を図ることが強く打ち出されている」と語った。

その他、通所リハビリ、ケアマネジメントの方法などについては「現在、通知を作成中で、関連するQ&Aも作成する予定があり、適宜情報提供をしていく」と述べた。

どんな表情で亡くなったか 行ってきたケアの結末に参加を

続いて「在宅復帰を目指す老健施設の医療行為と看取り～プロとして、ケアの結果が気になりませんか？～」と題し、全老健研修委員会の佐藤龍司委員が講義をした。

まず、人前でオムツを替えられる、毎日刻み食を与えられる、安全確保のために車いすに固定される、などの生活を自分自身が送っていたらどう思うかを参加者に問いかけ、このようなことは利用者から笑顔を奪う要因になるとした。

その上で、「尊厳がなければ人は生きられない。自分らしく生き、寿命を迎えるために、利用者のためになる介護を心がけなければならない」と強調した。

また、利用者が診察を受ける際、たらい回しにされることを防ぐためにも、「トータルに診ることができ、治療の落としどころを見つけられる医師が総合医として必要だ」とした。

在宅介護の秘訣として、当たり前の介護をすること、家族に無理のない介護サービスを提供して家で介護してもいいという気持ちにさせること、そのために多職種で団結することなどをあげた。

佐藤委員は「どんな表情で亡くなったか、家族はどんな思いになるのかを知り、プロとして自分の行ってきたケアの結末に参加し、結果を出していくことが介護に携わる人間にとって大事である」と訴えた。

地域包括ケア施設として 高齢者のスペシャリスト集団に

全老健の大河内二郎常務理事は、「地域包括ケアで医師は何をすべきか～在宅復帰率・回転率向上のために～」の研修テーマで講義をした。

はじめに、在宅復帰のできない高齢者につい

大河内常務理事

質問に答える東会長

進行役の淺井委員長

参加者どうし、意見交換がなされた（意見交換会にて）

ては「老健施設での生活が当たり前となっているような、他施設から移って来た人が多くみられる。このような老健施設から老健施設への入所の流れを止めることが、自施設の在宅強化型をめざす上で重要なマネジメントになる」と述べた。

また、「R4システム」を全面的に導入した施設は、在宅復帰率と回転率が高いことに触れ、残存機能を生かしたアセスメントができる「R4システム」の有効性を説明した。

最後に、「老健施設に対しては、老人ホームとしてではなく、在宅復帰・在宅支援を中心とした地域包括ケア施設という機能と、より高度な医療対応が今後ますます求められてくる。それらを踏まえて、老健施設が高齢者医療・リハビリ・看護・介護・福祉・栄養のスペシャリスト集団になっていくことが望ましい」と力強く語った。

報酬改定は強化型デイケアが目玉 老健施設が在宅の受け皿に

「全老健会長と語ろう～最近の動向、今後の流れ～（発言及びディスカッション）」では、東会長が講義を行い、全老健研修委員会の淺井八多美委員長が進行を務めた。

東会長は、平成27年度介護報酬改定の内容に言及し、そのなかの目玉として、通所の「強化型デイケア」をあげた。また、介護報酬改定に関して行った署名活動や、改定率▲2.27％に至る経緯についても触れた。

「通所リハビリ、ショートなど、さまざまな面での在宅復帰支援を老健施設が行い、医療機関から退院する要介護の高齢者を支えていく。老健施設が、在宅の受け皿になっていかなけれ

大磯教授

野尻委員

折茂副会長

浦委員

ばならない」と話した。

後半の参加者からの質問では、老健施設のインフラ、介護療養病床の廃止、強化型デイケア、認知症サポート医のことなどがあがり、それぞれについて丁寧な説明が行われた。

「意見交換会」は、東会長の挨拶、大河内常務理事の乾杯の発声の後、参加者どうしはもちろん、講師陣を交えての熱い意見交換がなされた。

２日目：理想的な老健管理医師をグループ討議で考える

研修会２日目は、浜松医科大学の大磯義一郎教授による講義「介護訴訟の実際」というテーマでスタート。

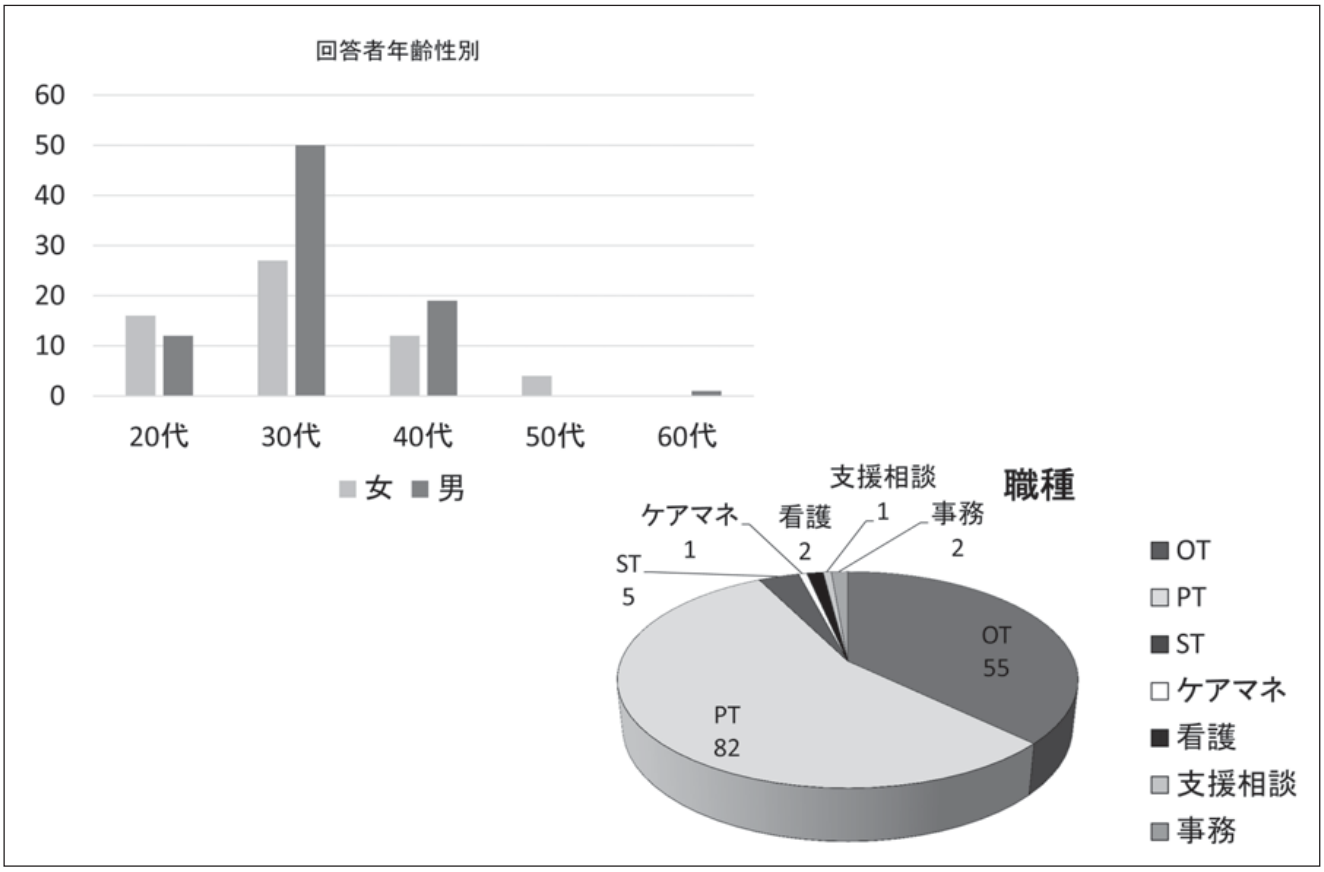
「介護水準を満たしているかどうかが、民事責任を問われる際の分岐点となる」とし、具体的な紛争事例を提示した。「紛争の本質をとらえ、コミュニケーションの悪化を未然に防いでいくことが、大切となる」と結んだ。

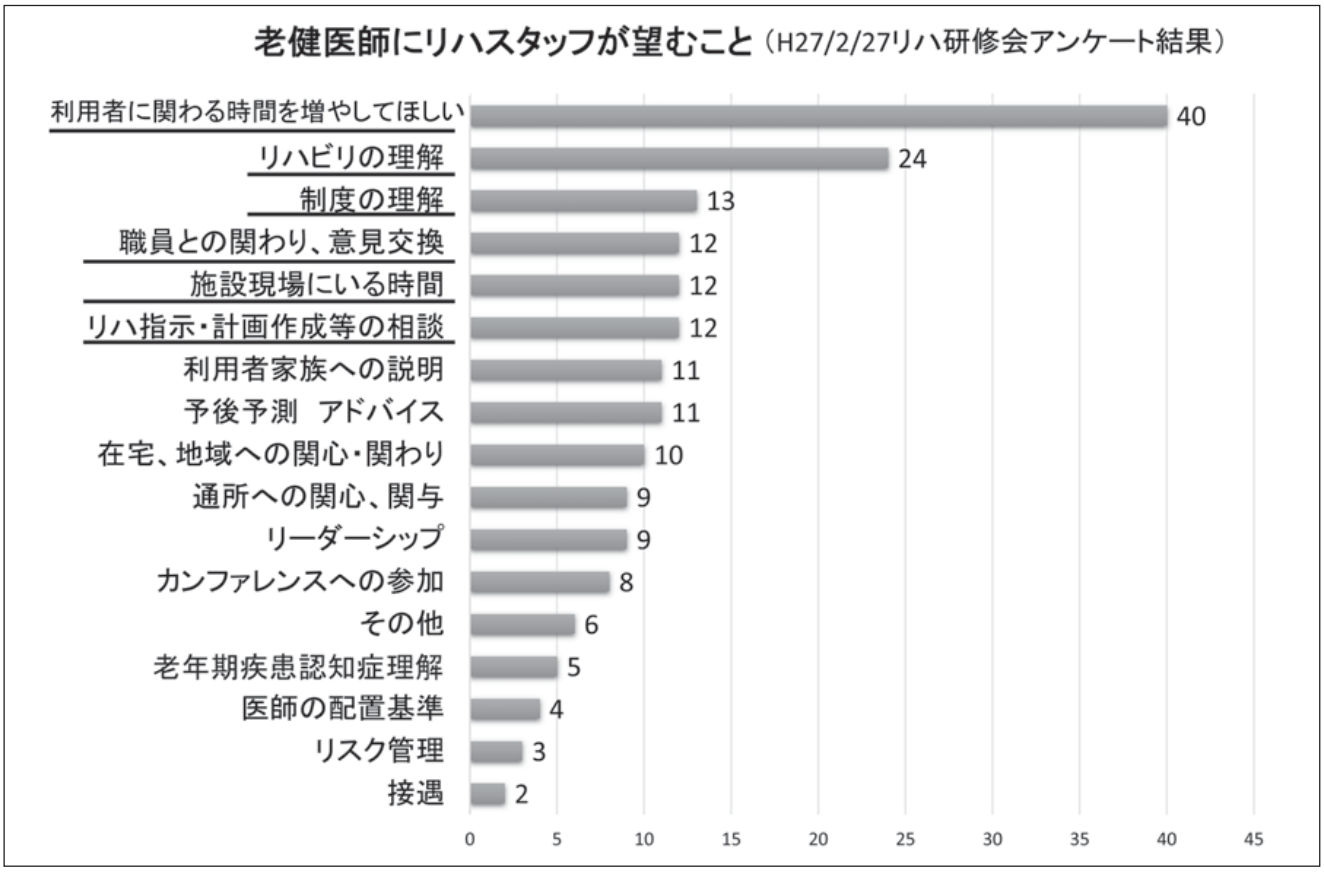
研修会最後には、「他職種が望む医師像～老健施設が地域包括ケアの中心的な機能を果たすために～」が実施された。

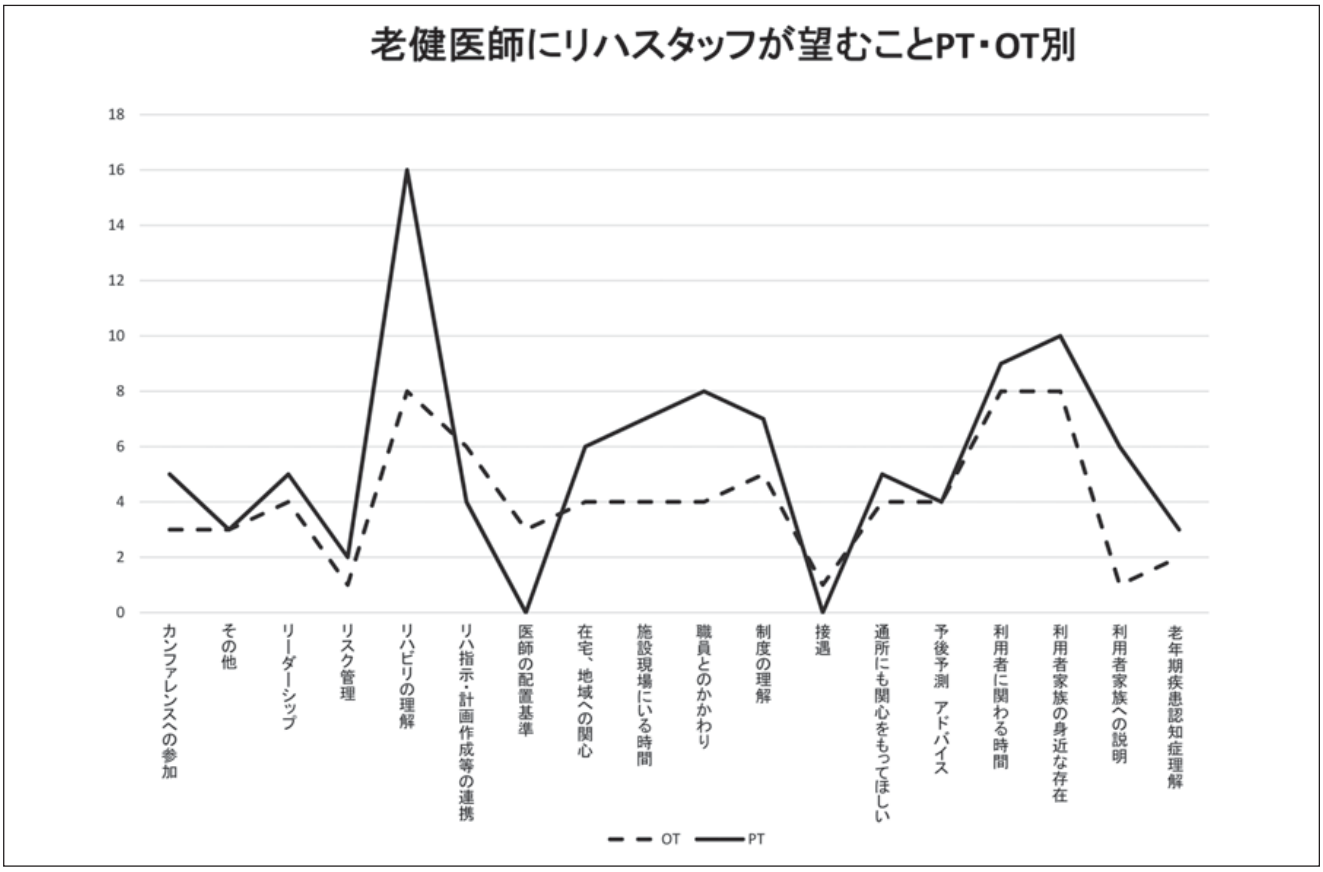
全老健の折茂賢一郎副会長が進行役を務め、理学療法士の野尻晋一研修委員会委員が「リハビリ職が望むこと」(次頁の資料参照)、支援相談員の浦慶子研修委員会委員が「相談員が望むこと」のそれぞれの内容で、おのおの30分間の発言を行った。

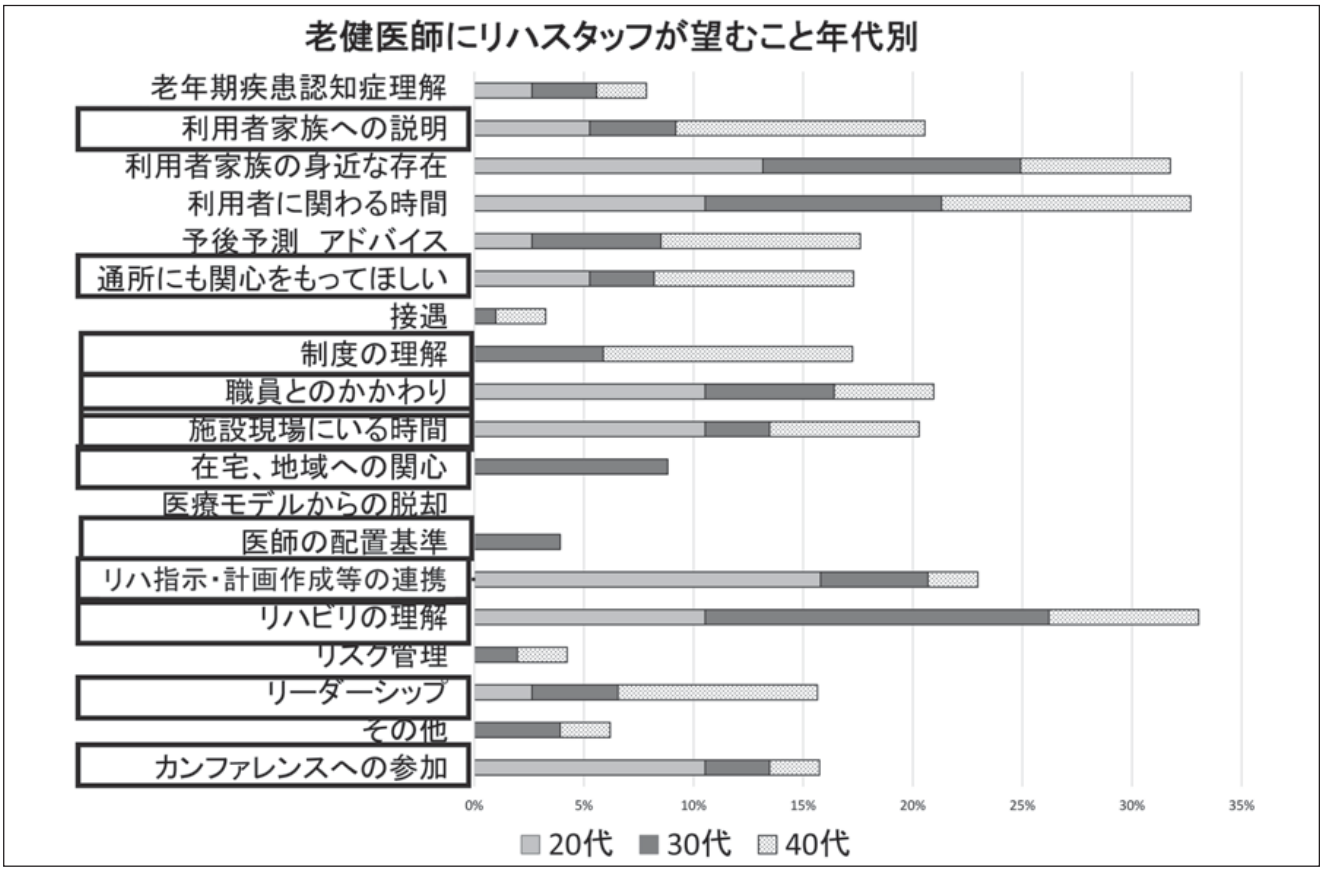
発言後は参加者がグループに分かれ、その内容についての討議が行われた。さまざまな意見がグループ内だけではなく、講師との間でも交わされ、会場のあちらこちらから老健施設運営に向けた情熱や使命感が伝わってきた。

資料


回答者年齢性別
60
50
40
30
20
10
0
20代
30代
40代
50代
60代
女
男
職種
支援相談
1
ケアマネ
1
看護
2
事務
2
ST
5
OT
55
PT
82
OT
PT
ST
ケアマネ
看護
支援相談
事務


老健医師にリハスタッフが望むこと（H27/2/27リハ研修会アンケート結果）
利用者に関わる時間を増やしてほしい 40
リハビリの理解 24
制度の理解 13
職員との関わり、意見交換 12
施設現場にいる時間 12
リハ指示・計画作成等の相談 12
利用者家族への説明 11
予後予測　アドバイス 11
在宅、地域への関心・関わり 10
通所への関心、関与 9
リーダーシップ 9
カンファレンスへの参加 8
その他 6
老年期疾患認知症理解 5
医師の配置基準 4
リスク管理 3
接遇 2
0
5
10
15
20
25
30
35
40
45


老健医師にリハスタッフが望むことPT・OT別
18
16
14
12
10
8
6
4
2
0
カンファレンスへの参加
その他
リーダーシップ
リスク管理
リハビリの理解
リハ指示・計画作成等の連携
医師の配置基準
在宅、地域への関心
施設現場にいる時間
職員とのかかわり
制度の理解
接遇
通所にも関心をもってほしい
予後予測　アドバイス
利用者に関わる時間
利用者家族の身近な存在
利用者家族への説明
老年期疾患認知症理解
OT
PT


老健医師にリハスタッフが望むこと年代別
老年期疾患認知症理解
利用者家族への説明
利用者家族の身近な存在
利用者に関わる時間
予後予測　アドバイス
通所にも関心をもってほしい
接遇
制度の理解
職員とのかかわり
施設現場にいる時間
在宅、地域への関心
医療モデルからの脱却
医師の配置基準
リハ指示・計画作成等の連携
リハビリの理解
リスク管理
リーダーシップ
その他
カンファレンスへの参加
0%
5%
10%
15%
20%
25%
30%
35%
20代
30代
40代